独占激白！"西麻布のDJ"が「明るいエイズ宣言」

文／横森理香（コラムニスト）

パトリックと出会ったのは私がニューヨークにいる時だった。今年28歳になるパトは、以前日本に住んでたことがあるから、日本語のオカマ言葉が異様にうまく、日本人好きで、よく一緒に遊んだものだ。イタリア系アメリカ人のゲイで、人種も何も壁や偏見のない自由さ、明るさと強さ、本能に忠実過ぎる弱さが生々しく人間っぽく、おもしろかった。そのパトがHIVに感染したと知った時、私はすでに日本にいた。友達では初めてだったから超ショックで、その問題に直面することは怖く、できたら避けたいって気持ちでいっぱいだった。

しかしパトちゃんは、明るい顔して今年の1月、日本に舞い戻って来てしまった。西麻布のクラブが、DJであるパトを招聘（しょうへい）したのだ。会ってみるとパトは全然元気で、以前にも増して強く優しくなってた。父親の仕事の関係で16歳から4年間住んだ日本。大好きな夜遊びを始め、のびのびとゲイライフに突入し、かつて心底愛した日本人の彼と出会ったのも、日本だった。だからその大好きな日本に、最後は帰って来たかったのだという。

「HIVになったことはね、そりゃ発病したら死んじゃうからよくないことだけど、僕にとってはすごくいいことだったのよ。僕はずーっとピーターパン・コンプレックスだったけど、HIVだって知った為に、すごい強い人間になれたのよ。残された時間が限られてると思ったら、一番大切なことからどんどんしてかなきゃいけない！　ネガティブに考えてる時間もないんだって頑張れるようになったの」

パトがHIVに感染したのは4年前だという。当時ニューヨークで付き合ってたアメリカ人の彼からHIVだということを聞かされ/それでもいいと思った。

「愛してたから仕方なかったのよ。気をつけてたんだけど、1回セックスしてる時コンドームやぶけちゃったんだもーん」

1年後、彼と別れてから検査に行った。その結果を聞いて3ヵ月くらいはショックで気がヘンになっちゃったパトちゃんだったが、イタリア人らしい強さとポジティブさで、立ち直りも早かった。

「その頃はもう昼間の仕事をやめてDJしかしてなかったからお金がなくってね。生活保護を受けてたのよ。そうすると医療費がタダになるから、エイズの治療もタダで受けられるの。そんで治療センターに入ってTセル（T4リンパ球）調べたら、やっぱりエイズにはストレスが一番良くないことが分かったの。だって最初の検査で800だったものが、生活に困ってくると500に、その時の彼と別れるってごたごたした時にはなんといっきに230まで落ちちゃったのよー。それからAZT（抗HIV剤）飲み始めて、ストレスが少なくて人が優しい日本に来る事にしたの」

現在、パトちゃんは新しいステディの彼もできて元気だ。彼は日本人である。

「彼にはね、僕はHIVだって最初に話したの。そしたら彼、『だから？　パトは僕との関係を始めたくないの？』って言ってくれた。すごいでしょー？　それから

▲西麻布のクラブ「WANNA DANCE」でDJプレイ中のパトリック。「僕をHIV感染者とだけ見てほしくない。道で見かけて何か言いたい事があったら、何でもいいから話しかけてほしい」　PHOTO　金澤智康

セイフ・セックスで関係を始めたのよー」

そしてパトは彼と付き合い始めて、彼との信頼感から、ある決意をした。これは自分だけの問題じゃない、自分と、自分の大好きな日本人の為に、これから日本でエイズ撲滅運動をやって行こう、と。

「僕は今はすごく元気でヤル気がある。でもいつ発病するか分かんないから、それまでにやっておきたいの。今の日本のエイズ運動って暗いでしょ。あれじゃあ若い子には影響力がないと思うのよ。それに、本人がエイズだって名乗り上げてテレビに出てる人は、顔も声も隠してるし、地味いなフツーの人ばっかり。僕は自分がゲイであることやエイズであることを暗くならずに語れるし、クラブでDJもやってるから、若い子の興味を引き付けることができると思うのよ」

まずエイズと自分、エイズで死んで行った友達のことを本に書きたい。それから、ゲイでもストレートでも、HIV感染者の日本人達とコンフィデンシャル（ざっぱん）に話し合って、その感染経緯、進行状況、心理状態を発表し、これからの対策に役立てたい。

「それからディスコ・ディーバを呼んで、エイズ・チャリティーのディスコ・クラシック・パーティを開きたいの。それからねぇ……これ言うとみんなに笑われるんだけど、僕『ルパン三世』の役、演（や）りたいのよう。だって、似てなーい？　日本に最初に来た時からの夢なのよー」

あくまでも明るいパトちゃん。こういう絶望の中にもスマイルと夢を忘れない強い人間性が、日本のエイズの明日に役立つキャラクターなのではないだろうか。